

「浮きし脂」覚え書き

中村 幸弘

ある時期の『古事記』訓読文には、二箇所に「浮きし脂」が現れてしまった。昭和三十三年からの十五年ほどは、殊にそうであった。古事記大成本『古事記』に直結して、日本古典文学大系『古事記 祝詞』の『古事記⁽¹⁾』が独走していた時期だからである。上巻・冒頭（別天神五柱）の「如^二浮脂^一而」のA「浮きし脂」と下巻・雄略天皇（金鉗岡・長谷の百枝櫻）の「宇岐志阿夫良」のB「浮きし脂」とである。

それまで、「浮きし脂」は、B「浮きし脂」しか存在していなかった。そのB「浮きし脂」についても、先師・今泉忠義は、その「し」への疑問⁽²⁾を夙に提出している。そこには存続の意が読みとれるというご指摘である。後年、此島正年が、『国語助動詞の研究体系と歴史⁽³⁾』のなかの、助動詞「り」の項と助動詞「き」の項とにおいて触れている。「き」の連体形「し」についての、その問題提起が、『古事記』の表現についての論考という論題ではなかったからか、A「浮きし脂」までが登場し、それが否定されて「浮かべる脂」に戻ったなどといわれた日本古典文学全集⁽⁴⁾の時代を経て、いま、といつても、それは十八年前ということになるが、新編日本古典文学全集⁽⁵⁾には、新訓「浮ける脂」を見るのである。ただ、その三テキストとも、どうしてそう訓んだか、訓み改めたかなどの注を当該箇所に見ることはできないのである。

第一章 否定されたA「浮きし脂」と新訓「浮ける脂」と

A「浮きし脂」は、B「浮きし脂」を受けて、原漢文の「次国稚如『浮脂』而、」の「浮脂」をそう訓読したのであろうか。

B「浮きし脂」は、一字一音の万葉仮名で「宇岐志阿夫良」とある歌謡のなかの用例で、そうしか読めない表記である。読みえた表現を生かして訓ることは、一つの訓みの手法でもあろうが、この箇所については、大きな過誤を犯すことになってしまったのであつた。

「次に国稚く浮きし脂の如くして、久羅下那州多陀用弊流時、流の字以上十
字は音を用ひよ。」まで読み進めて、「水母なす漂へる時、」の「る」から見て、「浮きし脂」の「し」に疑問を感じさせられるであろう。〈遠い昔に浮いた脂のようで、いま、水母のように漂つている時、〉というように整合性に欠けた表現ということになってしまったからである。

その頭注に「水上に浮かんだ脂（動物の脂）」とあるのを見て、この「浮かんだ」の「だ」が犯人の一人かとも思った。その「だ」は、撥音「ん」を受けた「た」である。近現代語「た」は、完了だけでなく、過去をも担う助動詞になってしまっている。「浮かんだ脂」は〈浮かんでいる脂〉を意味しているのに、「だ（→た）」なので、過去だと思い込んでしまったのではないか、と思えたからである。そこで、「浮きし脂」でよい、と思つてしまつたのであろう、とも思えてくるのである。

「曲がった道」は、〈曲がっている道〉である。「尖った鉛筆」は、去年までは尖っていて、いまは折れてしまつている鉛筆、ということではない。〈現在、尖っている鉛筆〉ということである。それらを、「曲がりし道」「尖りし鉛筆」ということは許されない。したがつて、A「浮きし脂」という訓読が許されないことは明らかである。

日本古典文学全集『古事記 上代歌謡』の『古事記』は、『古事記総索引本文篇⁽⁶⁾』で確認すると、度会本『鼈頭古事記』・田中本『校訂古事記』・寛永本『古事記』・国民全書本『古事記』に倣うことになる「浮かべる脂」と訓んでいた。そして、いま、新編日本古典文学全集『古事記』は、それまでに見ることのなかつた新訓「浮ける脂」と訓んでいたのである。平成の時代に入つてからの新訓「浮ける脂」である。

一般読者向けのテキストに登場した、この平成新訓「浮ける脂」は、何を手掛かりに、そう訓まれることになったのであらうか。同書の解説の、特に、その六の『古事記』の用字法と訓読の事などを見ても、新訓について触れられるところなどはなかつた。校注・訳者の著作『古事記の表記と訓読⁽⁷⁾』を一瞥したが、該当する章・節などは見当たらなかつた。本居宣長『古事記伝』も、「うきあぶら」と訓んでいた「浮脂」である。

第二章 そうしか読めないB 「浮きし脂」

A 「浮きし脂」の「し」は、いまでは誰もが等しく直ちに否定し、その否定の声に反論することのできない「し」である。先師を悩ませたのは、B 「浮きし脂」の「宇岐志阿夫良」であった。いま、新編日本古典文学全集『古事記』歌謡99に見る「浮きし脂」である。

○ 三重の子みへが 捧ささがせる 瑞玉盞みづたまつかに 浮うきし脂あぶら 落ちなづさひ …

(下巻・雄略天皇 (三重の采女／三五一・14))

先師は、その「浮きし脂」の「し」を過去と見ては甚だ不適切であるとして、連用形「浮き」が連体的に「脂」に

係る間に「その」というように意味を強めて挿入されたのが「し」である、というのである。そして、その「し」を助動詞以前の、語源は「其」が当たる、助詞的なものと見ようとしているのである。したがって、〈浮いている、その脂〉というように読解している、と見てよいことになろう。その「し」を〈ている〉とまではいっていなくても、その〈ている〉の意を表そうとしているところに、「其」が語源の助詞的な「し」が用いられてしまっていた、ということになるのである。

そこで、そのB「浮きし脂」が、一般にどう読解されていたかを、念のため確認しておくこととする。日本古典文学大系『古事記 祝詞』の『古事記』は、頭注に「浮いた脂のように。」としてあるだけである。その「た」は〈ている〉であろう。A「浮きし脂」を「浮ける脂」と訓んだ新編日本古典文学全集『古事記』も、そこを〈三重の采女みえうねめ

この三重の采女の一話は、雄略天皇治世贊美の一話である。長谷はつせの百枝槐ももえつきの下で酒宴の折、三重の采女が杯に槐の葉が浮いているのに気づかず、天皇に献上してしまった。天皇は激怒して采女を斬ろうとするが、采女は杯に浮いていた槐の葉を天地創造の「浮脂」に結びつけて、治世贊美の歌にして罪を許された。原漢文「其百枝槐葉、落浮a於大御盞」や「不b知落葉浮b於盞」のa・bの「浮」字は、槐の葉がa〈浮いた〉ことやb〈浮いている〉ことを表していて、日本古典文学大系『古事記』でも、a「浮かびき。」やb「浮かべるを：」と訓読している。そのよう

な状況下で、即興の才ある三重の采女が、「百枝櫻の葉が瑞玉盞に浮いている、その浮いているといえば、天地創造の昔、水に浮いていた脂のように落ちて浸り漂い」と詠んだ、と解することができるのである。

いま、その、三重の采女の深層をいつそう明快に示そうとするには、その深層を「」内にカタカナ表記し、比喩であることもカタカナ表記するなどして、読解することが考えられようか。すると、「瑞玉盞に、「百枝櫻ノ葉ノ浮ケルハ、天地創造ノ昔ノ」浮きし脂ノゴト 落ちなづさひ」ということになるであろうか。したがって、その「浮きし脂」は天地創造の昔、水に浮いていた脂のことで、「し」の始原が指示代名詞であろうと、助詞の「し」であろうと、連体機能のなかに、天地創造の昔を指していくた時制の機能も担わせていたものとも見えてくるのである。その「し」は、当代、既に、「き」の連体形なのである。

冒頭（別天神五柱）の「浮脂」を「うきあぶら」と訓む本居宣長『古事記伝』だったが、三重の采女の歌謡の、この部分の解説⁽⁸⁾は、右の私解を認めてくれそうに読みとれたのである。宣長は、この一句「宇岐志阿夫良」を隔てて、「三重の子が 捧がせる 瑞玉盞に」が「落ちなづさひ」に続いていると見ればよい、といっていたのである。そして、「浮きし」というように「し」を用いているのは、神代の始めに「浮きし」といつているのであって、現在そこにある御盆に落葉が浮いているのをいつているのではない。間違えてはいけない、ここは、契沖も、ここの意味が理解できなくて、酒が濃くて、膩^{あぶら}が固まっているのに似ているのをいう、といつているのは誤りである、と、そういうっていたのである。

○宇岐志阿夫良は、浮きし脂にて、神代の始メニ、国稚如ニ浮脂一、而多陀用幣流之時^{トキニ}、とある浮脂の如くなる物を、やがて脂として云るなり、其由は次に云ベし、【されば、上ノ句は此ノ一句をへだてて、落チなづさひへつ

づきて、此^ノ浮^シは、かの神代の初に浮^シと云^ハにて、今の御^盃に、落葉の浮^タるを云^ハには非^ズ、思ひまがふべからず、契^シ沖^シ此^ノ意を知らずして、酒^ヲ濃^ニして、膩^{アブラ}の凝^ルれるに似たるを云^ハと云^ハるは、非^{ナリ}、（以下略）

いざれにしても、B 「浮きし脂」は、遠い神代の昔のことをいっているのである。宣長に従えれば、挿入語句ということになろうか。線状性をもつて発言される日本語文に見られる、このような脈絡の途切れる表現については、どのように読解するのがよいのであろうか。とにかく、そのように、宣長も、この表現を構文の問題としていたのである。

第三章 助動詞連体形「し」と助動詞連体形「る」とが通う用例

冒頭の「浮脂」が、もはや、「浮きし脂」でないことは明らかである。『古事記伝』がそこを「浮脂」^{うきあぶら}という複合名詞として訓むまでには、相応の試訓が繰り返されたことであつたろう。その「浮脂」をA 「浮きし脂」と訓ませてしまつたのは、B 「浮きし脂」の「宇岐志阿夫良」である。そのB 「浮きし脂」の「し」に、先師が不適切さを訴えたのは、標準語法の「し」に照らして誤用の「し」を指摘したなかの一用例としてであつた。そして、上代のそれら「し」は、まだ過去の職能を持つには至りえていなかつたから、と見ようとするのである。

その段階で、先師は、助動詞連体形「し」と助動詞連体形「る」とが通う用例をセットにして取り上げる。後年、此島正年『国語助動詞研究体系と歴史』が助動詞「り」の項と助動詞「き」の項とで触れていること、既に紹介している。「醸みし大御酒」と「醸める大御酒」との関係については、「し」に、完了ないし存在の意のところにも用いられていて、としている。話題の二用例だが、念のため、以下に引いておくこととする。

○白櫛^{かし}の生^ふに、横臼^{よくす}を作り 横臼^{よくす}に醸^かみし（迦美斯^{おほみき}）大御酒^{おほみき} 美味^{うま}らに 聞^{きこ}しもち飲^をせ まろが父^ち

「浮きし脂」覚え書き

(古事記・中巻・応神天皇・歌謡48／二六七・2)

○櫃の生に、横臼を作り 横臼に釀める (迦綿廬) 大御酒 うまらに 聞しもち食せ まろが父

(日本書紀・卷第十・応神天皇・歌謡39／①四八五・16)

ただ、その助動詞連体形「し」と助動詞連体形「る」との問題については、武田祐吉『記紀歌謡集全講』が『日本書紀⁽¹⁰⁾』に見る助動詞「り」の連体形「る」を用いた用例について「古事記に迦美斯意富美岐とする。カ梅ルは、その現場について歌うものの如く、これが原形であろう。」といつてゐるのである。伝承を意識した捉え方で、その原形を見定めている。

武田のいう「醸める大御酒」原形説は、その歌謡の成立から見て、その営みを眼前にして詠んだ場合のほうが先行するであろうといつていて、容易に理解することができる。そして、伝承の過程において、その「醸める」が「醸みし」となっていくのもまた、容易に理解することができる。そこで、その「醸みし」を、伝承という時間の推移ではなく、その営みそのものを既往と認識した結果と見ることはできないか、そうとしか解せない用例が発掘できないか、と思つてみた。その用例は、同じ『古事記』のなかから、いとも簡単に抜き出すことができたのである。

どうして、先師も武田も、この用例を引いて、前二用例と併せ考察するに至らなかつたのであろうか。もちろん、前二用例は、同一歌謡の別伝であつて、したがつて、その「し」と「る」とだけに注目してしまつたのであろう。

○須々許理が 醸みし (迦美斯) 御酒に 我醉ゑれゑひにけり 事無酒 笑酒ゑごじに 我醉ゑれゑひにけり

(古事記・中巻・応神天皇・歌謡49／二六九・6)

須々許理は、新しい酒の醸造技術をもつて百濟から渡ってきた仁番^{には}の別名である。その須々許理が造つて献上した

お酒であるので、この「醸みし御酒」には、過去の助動詞「き」の連体形「し」を用いた事情が理解できるのである。

この歌謡に先立つて、その本文に「是の須々許理、大御酒醸みて 献りき。」とか「天皇、是の献れる大御酒にうらげて、」とか述べられているところからも、眼前において〈醸造している〉大御酒でないことが明らかである。中古から顯著となる目睹した過去ではないかもしだれないが、その事態が既往の事柄であることが、歌謡48の用例も含めて明らかであろう。B「浮きし脂」の「し」についても、そう認識することができるであろう。

先師が、次の二用例もセットにして引いて、「蒔きし」と「蒔ける」との、その「蒔きし」の「し」について、強意から過去への過渡期の用例と見てている用例である。しかし、この「蒔きし」も、事態としては既往の事柄というように見えてくるのである。

○…辺つ波 そに脱き棄て 山方に蒔きし（麻岐斯） 茜春き 染め木が汁に 染め衣を ま具に 取り装ひ…
○山方に 蒔ける（麻祁流） 青菜も 吉備人と 共にし摘めば 楽しくもあるか

（古事記・上巻・大国主命・歌謡4／八九・10）

（古事記・下巻・仁徳天皇・歌謡54／二九一・4）

歌謡4に見る前用例は、山のほうに蒔いておいた茜を白で春いて染料にして、その染料で染めた衣を身に着けて、というのである。蒔いておいただけでなく、その茜を白で春いて染料にしたうえに、その染料で染めた衣を身につけて、といつてるのである。その事態は、完全に既往の事柄である。一動作の時制ではなく、関わるすべての行為が、既往の事柄として認識されるのである。そこに、助動詞「き」の連体形「し」が起用されているのである。一方、歌謡54に見る後用例は、山のほうに蒔いてあつて、いま、そこにある青葉を、吉備の少女と一緒に摘んでいるのである。

両用例は、「蒔きし」と「蒔ける」との違いを鮮やかに見せてくれている、といえるのである。

第四章 『万葉集』歌に見る「降りし雪」と「降れる大雪」となど

前章の記紀歌謡に見たような、同一動詞に助動詞連体形の「し」と「る」とが付いて、その現場を詠んだ原形歌と、時や人を経た伝承歌とに、微妙に詠み分けていくような用例に、そうしばしば出会えるものではない。その希な出会いといえる一組について、武田の講読を受けて、そのお説を強調すると、『日本書紀』の「醸める」が原形歌で、『古事記』の「醸みし」が伝承歌ということになるのである。

一方、此島『国語助動詞研究体系と歴史』は、その「醸みし」の「し」も、そして、新たに、「今日降りし雪」の「し」についても、先師・今泉の「浮きし脂」の「し」に重ねて見ていこうとする。その「今日降りし雪」とは、『万葉集』に見る、次の一首である。同書から、そのまま引くこととする。

○今日降りし雪にきほひてわが宿の冬木の梅は花咲きにけり

(万八・一六四九)

此島は、右用例歌の「し」についても、B「浮きし脂」の今泉解に重ねて、完了ないし存在のところに用いられている「し」である、としている。この「降りし」の「し」も、「その」と指示するところから、完了の動作態を表すほうが古く、それが、やがて、テンスに転じて過去の意にも用いられるようになった、と考えようとしているのである。

その一首について、筆者は、寒中に開く梅花が雪と争う姿勢の過程を読みとつて、次の段階に移行した、その瞬間に、「今日降れる雪」が「今日降りし雪」と詠まれたものと見たいのである。大伴宿祢家持には、同じ今日の日であつても、その「雪」が、冬木の梅について「花咲きにけり」と認識された、その瞬間に、それ以前の事態が直ちに既往

の事柄に変身するのである。「今日降れる雪にきほひてわが宿の冬木の梅は」が「花咲きにけり」と認識された瞬間に、「今日降りし雪」に変身したのである。

「雪」に係つていく動詞「降る」の連体修飾語形は、時制を意識しない、さらにいえば時制を無視した「降る雪」が圧倒的に多く、二十五用例を数える。⁽¹⁾ そうではあっても、いま見た「降りし雪」が確かに存在するのである。その一方に、「降れる大雪」も現れるのである。以下に、「降りし雪」と「降れる大雪」とが対比できるように引いていくこととする。

○けふ今日降りし雪に競ひて我がやどの冬木の梅は花咲きにけり

○おほみや大宮の内にも外にもめづらしく降れふゆきる大雪な踏ふみそね惜をし

（万葉集・⑧・一六四九）
（万葉集・⑯・四二八五）

前用例「降りし雪」については、そこに「し」を用いた事情など、一定の解釈を既に述べてきている。同じ「けふ今日」一日のことではあるが、それまで「降れる雪」であつた、その「雪」が、一首に詠もうとした直前に、冬木の梅が「花咲きにけり」と認識されて、その瞬間、「降りし雪」に転換されたのである。

それに対して、後用例は、内裏の内にも外にも珍しく降った大雪で、いまもたくさん積もつていて、踏みさえしなければ当分積もつていると思える大雪である。絶対に踏んではならないぞとは、誰に言つてゐるのであろうか。実は、「十一日、大雪落積、尺有二十」。因述「拙懐」歌三首」という題詞があつて、「拙懐」という謙譲表現を用いてゐるからである。なお、また、この一首も、大伴家持の一首である。

右の「降りし雪」と「降れる大雪」との対応は、次の「咲きし冬木」と「咲ける梅の木」との間にも見ることができるのである。

○こぞ去年咲きひさき久木今咲くいたづらに地にか落ちむ見る人なしに

（万葉集・⑬・一八六三）

○雪の夜を奪ひて咲ける梅の花今盛りなり見む人もがな

(万葉集・⑤・八五〇)

右二首は、ともに「今」を意識して詠まれている。そのうえで、前用例を見ると、その「今」を、去年の「今」と重ねて一首としていることが読みとれる。その「久木」は諸説あつて定まらないが、その咲いていた花とともに終わつた去年の出来事の何か—例えば、その花を見に来た人のことなど—が「し」の必要性を意識させたものと読んでいいきたいのである。

動詞「咲く」が連体修飾語となるとき、その多くが「咲ける」となつていて。一つには、詠歌の対象が眼前に存在しなかつたら、見ることができないからである。『万葉集』歌に見る、連体修飾語となつていて「咲ける」は、二十用例存在する。⁽¹²⁾ そのうちの一用例は、正宗敦夫編『万葉集総索引单語篇⁽¹³⁾』では「咲きし」となつていたのである。つまり、その後の改訓なのである。

○白露に争ひかねて咲ける萩^{あらそ}（咲芽子）散らば惜しけむ雨な降りそね

(万葉集・⑩・一二一六)

その萩が、白露に逆らい負けて咲いた、その後の何らかの段階へと意識が移つていたとしたら、「咲きし萩」と詠まれてもいたことであろう。しかし、下の句に「散らば惜しけむ」と詠み添えるためには、いま咲いていなければならないことになつて、そこで、「咲ける萩」と詠むことになつたのである。その部分の原文は、「咲」字一字である。そこで、一旦は、「白露に争ひかねて咲きし萩」と訓ませておいて、下の句を見て「咲ける萩」と訓み改めさせようと企んで、送り仮名なども敢えて避けた正訓表記だった、といいたくなるほどなのである。

第五章 「浮かべる脂」か「浮ける脂」か

もはや、『古事記』訓読文に、A 「浮きし脂」は存在しない。既に、何度も触れてきているところである。その結果として、いま、「浮脂」は、「浮かべる脂」と訓んでいくのがよいのか、「浮ける脂」と訓んでいくのがよいのか、ということになつてきているのである。『古事記総索引本文篇』も、既に見てきていて、「浮かべる脂」と訓んでいるテキストが四本見られたのに対して、「浮ける脂」という訓みは、一般読者としての筆者には、一九九七年に初めて知った訓み方だったのである。その訓みが、『古事記』訓読文として初めて登場したのであつたとしたら、相応の論拠があつての改訓であり、新訓であつたはずである。

ただ、その新編日本古典文学全集『古事記』の、その当該本文の頭注欄や解説の六の『古事記』の用字法と訓読等を見ても、その新訓について触れてくれてあるところが見当たらなかつた。既に述べたところである。その後、神野志隆光・山口佳紀著『古事記注解』⁽¹⁴⁾（笠間書院）に期待してページを追つたが、あるいは見落としているのか、該当する項目に出会うことができなかつた。

そもそも、「国稚如「浮脂」而」の「浮」字は、「浮く」であるにせよ、「浮かぶ」であるにせよ、「水に」の意を内包していると見なければならない。続く「久羅下那州多陀用弊流」から、そう推測させられるからである。そのような状態をいうふさわしい動詞は、「浮く」であるのか「浮かぶ」であるのか、いま、その選択を迫られているわけであるが、もちろん、先学の多くは、その動詞として「浮かぶ」を選んできていることが明らかなのである。

「浮く」も「浮かぶ」も、上代語として確かな用例を見せていている。「…いざりする海人あまの娘子をとめは小船をふね乗りつららに浮

けり…」（万葉集・⑯・三六二一七）も「潮満てば水沫に浮かぶ砂にも…」（万葉集・⑪・一七三四）も、〈沈むことなく水上にとどまつていて〉さまをいつてはいる。後世の用例とはなるが、「よどみに浮かぶうたかたは、…」（方丈記・ゆく河）などから読みとれる〈水中にとどまつていて〉意は、どちらかといふと、「浮かぶ」が担うことになるようである。「脂」となると、その〈水上にでも水中にでも、沈むことなくとどまつていて〉意の表せる「浮かぶ」のほうが適切ということになつてこようか。

そもそも、「浮かぶ」は、「浮く」に反復・継続の助動詞が付いて成立したものと解されていよう。^{〔15〕}その「浮かぶ」の「ふ」が濁音化したものと感じとれるのである。「浮く」「浮かぶ」とも用例は多くないが、「あしひきの山のもみち葉今夜もか浮かび行くらむ山川の瀬に」（万葉集・⑧・一五八七）／「涙川うかぶみなわも消えぬべし流れてのちの瀬をもまたずて」（源氏物語・須磨）など、〈水上・水中に漂つていて〉さまの見えてくる用例である。

さて、漢文訓読に採用されたのは、「浮かぶ」だけであった。そして、その理由のほどはわからないが、古辞書の『新撰字鏡』『色葉字類抄』『類聚名義抄』『下学集』『和玉篇』『文明本節用集』『饅頭屋本節用集』『黒本本節用集』までに登載されているのは、ウカブに限られる。『易林本節用集』に至つて、ようやくにして、ウクとウカブとの両動詞が載ることになるのである。『古事記』訓読文として、諸本のうちの多くが、「浮脂」を「浮かべる脂」と訓読しているのも、宜なるかな、といえるのである。

そのような長きにわたつての定着した訓みに逆らつて、新編日本古典文学全集『古事記』が、そこを「浮ける脂」と訓んだのには、どのような判断があつたのであろうか。実は、その「浮ける脂」部分の同書の頭注にも、十分には理解できていないところがあるのである。その頭注九には、「天と地とが始り、高天原に神々が現れた時の地上の状況。

國となるべきもの全体が形定まらずにある状態を「浮ける脂」やクラゲにたとえる。國土が海上に浮いているのではない。」（傍線は筆者）とある。そして、その部分の現代語訳には、「…水に浮かんでいる脂のようで、水母のよう^aにふわふわと漂っていた時、…。」（この傍線も筆者）とあって、それぞれの傍線部aとbとは、どう理解したらよいのであろうか。國土となるべきもの全体が、水に浮かんでいる脂のようであり、水母のよう^bにふわふわと漂っていて、その状態をいつているのであるから、國土が海上に浮いているなどというように誤解してはならない、という理解でよいのであろうか。

さて、B「浮きし脂」が現れる、あの歌謡99のところで、新編日本古典文学全集『古事記』は、その「浮きし脂」に「杯に浮かんだ楓の葉を浮いている脂にたとえたもの。上巻冒頭部の「国稚く浮ける脂の如くして」の表現と対応。次の「水こをろこをろに」の表現とともに、天皇の世界の神話的な始源を喚起する。」¹⁶という注も施している。この注にそのまま従うと、上巻冒頭部に「浮ける脂」と述べられているから、それに対応させて「浮きし脂」と詠まれたのだ、と読みとつたらよいことにならうか。そこが、上巻冒頭部に「浮脂」とあるから、それに対応させて、というのなら理解できるが、そうではない。その「浮脂」が「浮ける脂」以外には訓めないというのなら、そもそもいえようが、そうではないのである。筆者がいま知りたいのは、新編日本古典文学全集『古事記』が、その「浮脂」をどういう判断で「浮ける脂」と訓んだかである。

そこで、新編日本古典文学全集『古事記』が、「浮脂」を「浮ける脂」と訓んだ理由を、僭越ながら推測させていただきたいたと思う。上代日本語文献には、動詞を連体修飾語化させると、時制の意識をはたらかせて、その場面や状況に応じて、助動詞の連体形「る」を用いる場合と連体形「し」を用いる場合とが時に見られた。いや、しばしば

見られた。⁽¹⁷⁾ 既に見てきている、「醸める」と「醸みし」との対応であり、「蒔^まける」と「蒔きし」との対応である。「降れる」と「降りし」とであり、「咲ける」と「咲きし」とでもある。さて、『古事記』天地初発の「浮脂」は、下巻・雄略天皇の三重の采女の歌謡⁹⁹の、その「宇岐志阿夫良」の「浮きし脂」という比喩表現の原拠である。その原拠あつての「浮きし脂」であるので、原拠は、それに対応する表現として「浮ける脂」と訓読していくのが、『古事記』の、殊に歌謡と関連ある部分の訓読としてふさわしい、と判断したのである。そう推測させていただくことで、この覚え書きは、ひとまず、擱筆することとする。

(平成二十七年十月三十一日)

註

- (1) 日本古典文学大系『古事記 祝詞』(岩波書店・昭和33年) の『古事記』(倉野憲司校注)。
- (2) 今泉忠義「助動詞「き」の連体形」(『金沢博士還暦記念 東洋語学乃研究』(三省堂・昭和七年) 所収)。なお、その『金沢博士還暦記念 東洋語学乃研究』には、折口信夫「形容詞の論(その一)」も載っていて、形容詞終止形の「一し」の「し」は、強めの助詞「し」と違うのではないかなどと述べてあって、今泉の助動詞「き」の連体形「し」を強めの助詞「し」かとするのと、関連することになる。その両論文の前に武田祐吉「形容詞の論(その一)」があつて、形容詞は連体形が原形で、活用語尾シが生じた経緯、殊に動詞にシが付いて形容詞の活用の基礎を作つた、と述べている。
- (3) 此島正年『国語助動詞の研究体系と歴史』(桜楓社・昭和四十八年) の助動詞「り」の項の一八九ページと助動詞「き」の項の二一七ページ。引き続いて触れるところも、このページ周辺である。

「浮きし脂」覚え書き

- (4) 日本古典文学全集『古事記 上代歌謡』(小学館・昭和48年)の『古事記』(萩原浅男校注・訳)。
- (5) 新編日本古典文学全集『古事記』(山口佳紀・神野志隆光校注・訳/小学館・一九九七年)。なお、小稿において引く『古事記』本文は、特に断らない限り、同書に拠つた。
- (6) 『古事記総索引本文篇』(高木市之助・高山民藏篇/平凡社・一九七四年)。
- (7) 山口佳紀『古事記の表記と訓読』(有精堂・一九九五年)。
- (8) 『本居宣長全集 第十二卷』(筑摩書房版・担当編者大野晋・昭和四十九年)『『古事記伝』第四十二卷』三四四ページ。
- (9) 武田祐吉『記紀歌謡集全講』(明治書院・昭和三十一年)二六一ページ。
- (10) 小稿が引く『日本書紀』本文は、新編日本古典文学全集『日本書紀①』(小島憲之 直木孝次郎 西宮一民 蔵中進 毛利正守 校注・訳/小学館・一九九四年)に拠つてている。
- (11) 小稿が引く『万葉集』歌も新編日本古典文学全集『万葉集①②③④』(小島憲之 木下正俊 東野治之校注・訳/一九九四(六年)に拠つた。その『万葉集』の「降る雪」は、次の歌番号をもつて示す各歌に現れる。③・二九九/三二九/⑤・八三九/⑥・一〇一〇/一〇四一/⑧・一六三六/一六四五/一六五五/一六五八/⑩・二三三三/二三四四/二三四四の一云/二三四七/二三四八/⑬・三三八一/⑭・三三五八の一本歌/⑯・三九二三/三九六〇/四〇一六/⑯・四二三〇/四二三四/⑳・四四三九/四五二六の二十五用例である。なお、最終用例は、『万葉集』全歌の最終歌で、「今日^{けふ}降る雪のいやしけ吉事」と詠まれている。
- (12) 『万葉集』歌の「咲ける梅の花」「咲ける盛り」など、連体形修飾語となつている「咲ける」は、次の歌番号をもつて示す各歌に現れる。⑤・八五〇/八五一/⑧・一四二八/一四五二/一五〇〇/一五三三/一五九七/一六四〇/一六四一/⑩・一八一〇/一八八七/一一〇〇/一一一二/一二一六/⑯・三九六九/三九八五/⑮・四一〇六/⑯・四三〇一/⑳・四四四六/四四五二の二十用例である。
- (13) 正宗敦夫編『万葉集総索引 単語篇』(平凡社・昭和四十九年)。
- (14) 神野志隆光・山口佳紀著『古事記注解』(笠間書院・2=一九九三年/4=一九九七年)。
- (15) 『日本国語大辞典第二版』(小学館・2=一九九〇年)の「うかぶ」の語源説には、四説が紹介されるが、そのまま従うこととはできないものばかりである。筆者自身がそう感じていたところと同じ解説をしてくれてあったのが、『日本語文法大

「浮きし脂」覚え書き

辞典』（山口明穂 秋本守英編／明治書院・平成13年）のなかの「うく・うかぶ・うかす・うかべる」の項の語誌である。「うかぶ」は「うく」に存在継続の助動詞「ふ」が付いてできた語である。（以下略）（藤井俊博）とあつた。

(16)

新編日本古典文字全集『古事記』三五一ページ頭注の20。

(17)

上代日本語文に見る動詞の連体修飾語用法の頻度は極めて高く、その連体修飾語化に際して、助動詞連体形の「る」を添える場合と「し」を添える場合とに分かれたのである。いま、『古事記』歌謡の、その実態だけ整理しておく。

○完了の助動詞「り」の連体形「る」を添えている、動詞の連体修飾語

・項がせる玉の御統（歌謡6）／・黥ける利目（歌謡18）／・佩ける太刀（歌謡23）／・着せる襲衣（歌

謡28）／・向へる尾津崎（歌謡29）／・山籠れる倭（歌謡30）／・佩かせる太刀（歌謡47）／・立てる梓弓檀（歌謡51）／

・蒔ける青葉（歌謡54）／・生ひ立てる鳥草樹・生ひ立てる葉広（歌謡57）／・仲定める思ひ妻（歌謡88）／・取り佩ける太刀／・治め賜へる伊邪本和気（歌謡104）—※「梓弓」は枕詞なので、「立てる」は「檀」に係つていく

○過去の助動詞「き」の連体形「し」を添えている、動詞の連体修飾語

・蒔きし茜（歌謡4）／・率寝し妹（歌謡8）／・植ゑし山椒（歌謡12）／・置きし剣の太刀（歌謡33）／・奉り来し御酒（歌

謡39）／・遇はしし娘子・遇はしし女・見し子ら・見し子（歌謡42）／・寝しく（歌謡46）／・醸みし大御酒（歌謡48）／

・醸みし御酒（歌謡49）／・打ちし大根（歌謡61）／・打ちし大根（歌謡63）／・浮きし脂（歌謡99）—※「く」は名詞化する接尾語

助動詞連体形の「る」「し」の多さは、動詞の連体修飾語の多さによるのである。形容動詞も誕生していない時代の日本語文の実態である。『時代別国語大辞典 上代編』（三省堂・昭和四十二年）の助動詞「き」の項に、「この助動詞の活用形として上代にあらわれるところでは、まず、キ・シ・シカの三つがあり、それぞれ終止形・連体形・已然形と考えられるが、ことに連体形のシの用例が多く、なお、このほかに未然形としてセ・ケの存在を考えることもできる。」（傍線は筆者）とある。その連体形シの用例が多い理由は、動詞の連体修飾語の多さにあつたのである。

—各文献の刊行年については、それぞれの奥付に従つた。—

〔後記〕 小稿の成るについては、殊に関係文献の確認など、渡邊卓氏のご協力を賜つた。記して謝意を表したい。